

アメリカ合衆国ハワイ州 における伝統的教育思想

——1820年以前——

田 中 圭 治 郎

ハワイ州は、現在アメリカ合衆国の一州として軍事基地、観光業においてアメリカ合衆国の不可欠の一部となっている。しかしながら、ハワイはかつてポリネシア人の王が支配した王国であり、独自の文化を持っていた。本稿では1820年ニューイングランド地方からやってきたプロテスタント宣教師団がハワイをキリスト教化し、さらにアメリカ化する以前のハワイの教育の実態について論及してみる。さらに従来の伝統的ポリネシア文化、教育方法だけでなく、ヨーロッパ人との接触によるハワイ文化の変質の過程をも併せて述べてみたい。

1 節 ハワイの政治形態と土着文化

a. ハワイ人（カナカ族）の出現

ハワイ諸島は、北太平洋の真ん中に位置し、アメリカ、アジア両大陸の間でかつ、他の島々からも離れた孤島である。太古には、ハワイ諸島は存在せず、海底火山の噴火により、島々が徐々に形成され、今日の姿となったのは、2500万年—4000万年前後と推定されている。そのため、当地では当初、生物は存在せず、時代が下るにつれてさまざま動植物が生息するようになる。だが、地相が新しく、また島全体が熔岩で覆われているため、この諸島で生息できる生物の種類は限定されていた。⁽⁶⁾

この諸島に初めて足を踏み入れたのは、南太平洋から北上してきたマルケサス人である。この時期は、紀元500年から600年の間と推定される。彼らは、サモア、マオリ、タヒチ各人種と同じポリネシア人であった。⁽²⁾ 当時、南太平洋は、ポリネシア人の大型船が行き交い、さらなる新しい土地を求めて、彼らが次々と移動を始めていた。更に、紀元1100年から1250年の間に、今度はソシエテ諸島、タヒチ諸島からポリネシア人が移住を始める。⁽³⁾

彼らは、先住のマルケサス人たちを征服しながら、まずハワイ島に住みつき、次々と他の島々に移り住み、各地で小さなコミュニティを形成していく。彼らは、モイと呼ばれる王を中心とした社会を構成していくが、これらは、彼らの出身地の制度、文化を持ち込んだものといえよう。しかし、「長距離航海の時期の終わりとともに、ハワイと中央ポリネシアとのコミュニケーションは途絶え、ハワイ人たちは、1778年まで世界の他の地域からほとんど完全に孤立して生活していた」⁽⁴⁾ため、独自のハワイ文化が形成されていく。⁽⁵⁾

ただ、19世紀に入るとスペイン人たちが、フィリピンとメキシコの間を航海の途中ハワイ諸島に立ち寄った可能性が考えられる。⁽⁶⁾ しかしながら、当時のハワイ社会へのスペインの影響は現在確認されるに至っていない。

ハワイ諸島には金属が存在せず、ハワイ人たちが石を加工してさまざまな道具を作るといった「石器時代」から抜け出すのは、西欧人が鉄をハワイに持ち込んでから後のことである。また、食料は、彼らがソシエテ、タヒチ両諸島から持ち込んだタロ（イモ）が主食となり、それに魚、海草、塩⁽⁷⁾が加えられ、最小限の栄養は確保されていた。その他に彼らが持ち込んだブタ、犬、ニワトリは主として祝宴のための食糧であった。⁽⁸⁾

衣料としては、カバと呼ばれる木から取った繊維が使用される。時代が下るにつれてカバはいろいろな色に彩色され、壁紙、飾り等、さまざまに用途が広がり、ハワイ文化を代表するものとなっていく。ハワイ人たちは、自然の中で自給自足の生活を営み、自然の神を敬い、先祖代々の慣習を守り続ける生活をしていたのである。

b. 社会制度（カプー）

カプーは、タヒチではタブーとよばれ、「聖化された」、「禁忌された」という意味である。神聖と見なされた事物・場所・行為・人格・言葉などについて接触・常用などを制した宗教的禁忌であり、わが国の「いみ」とも通じるものがある。⁽⁹⁾ ハワイ社会は、カプーによって4つの階級に分けられた階級社会である。一番上の階級は、アライ階級である。この階級は、王族、族長によって成り立っており、ハワイの支配階級である。ハワイ諸島では各地に王や族長が群立し、彼らの支配下に各コミュニティが形成されていた。次は、聖職者、医者、教育者、職人によって成り立っているカフナ階級である。この階級は、ハワイ社会での知識階級であり、文化遺産継承に関係する階級である。三番目は、農民、漁師を中心とする労働者階級であるマカアイナナ階級である。彼らがハワイ社会の総ての生産を掌り、彼らが事実上ハワイ社会を支えていた。四番目にカウワ階級と呼ばれる不可触賤民階級が存在する。

このように当時のハワイの社会では、「近代的な意味での中産階級は存在せず」、支配、被支配の関係が維持されていた。しかしながら「カフナ階級は族長たちと密接な関係」⁽¹⁰⁾を持ち、人的交流もあり、アライ階級との階級間の格差はあまりなかった。

カプーは、単なる社会制度に止どまらず、社会慣習をも支配していた。被支配階級の人々がアライ階級の王や族長の家に影を落としたり、彼らの家の囲いや戸口を通過した場合、罰せられた。これらカプー違反者は、石やこん棒によって打ち殺されたり、絞め殺し・生き埋め・火あぶりといった刑罰が待っている。このような支配階級への態度・行動だけでなく、女性がブタ、ココナツ、バナナ、サメの肉を食べてはならないし、また男性と共に食事をしてはいけないというように日常生活行動にまで規制がなされていた。⁽¹¹⁾ 人々は、カプーの下、いろいろな禁止事項に縛られながら生活を送っていたのであるが、当時のハワイ社会についてサミュエル・カマカウは、次のように述べている。

古代のハワイ人たちは、巧みな技術と多くの知識を持っており、激しい労働を常としていた。——土地を耕作することが、彼らの主たる仕事であった。彼

らは、山から切り出した堅い木で作った道具や石斧を使用する以外は、何等の道具を使わずに、広い面積の土地を耕しタロ、サツマイモ、ヤム、バナナ、サトウキビなどを栽培し、自家の食糧としていた。最初の収穫物は、常に神に奉納された。——ハワイ諸島の土地は、豊かであり、カウアイ島、オアフ島とモロカイ島の主たる作物は、川の堤防に沿って点在する人工的に作られた池の中ややわらかで湿った土地で栽培された湿地用のタロである。マウイ島、ハワイ島といった湿度の少ない土地では、乾燥地用タロが栽培され、またラナイ島とニイハウ島は、サツマイモが主たる作物であった。カウアイ島とモロカイ島の養魚場の多くは魚を供給するためのものであった。

屋外の労働の総ては男性によってなされ、それは土地を耕し、魚を取り、イムを料理し、女性の屋内での作業に必要な家具を作ることであったのである。カウアイ島、オアフ島では、女性が男性と同様に、料理、土地耕作などの重労働に従事していた。⁸⁹

c. ハワイ固有の文化と宗教

ハワイ文化の基調はポリネシア文化である。ポリネシアの領域は、北はハワイ諸島、南はトンガ諸島、東はイースター島、西はサモア・トンガ諸島と広範囲にわたっており、文化的にはミクロネシア、メラネシアと並んで、太平洋文化圏を形成している。ポリネシア文化は、他の両文化から影響を受けながらも独自の文化を持っており、ニュージーランドのマオリ文化もポリネシア文化に属する。ポリネシア人は海洋民族であるため、海に関連した文化であるということが出来る。海洋動植物に関心が向けられるだけでなく、航海に必要な天体観測の技術もかなり高度なものを持っていた。ポリネシア人たちは、広い海洋に点在する島々に居住しているため、諸島間では文化・言語に若干の変化がみられる。

ハワイ人の生活は、原始宗教に根差したものであった。ハワイには何百という諸々の神が存在し、人々は自然現象の中に神の存在を見ると同時に、大地の中に諸々の神が宿っていると信じていた。それらの神々の中で、「ク」、「カネ」、「ロノ」、「カナロア」の4人の神が有力である。「ク」の神は、戦いの

守護神であり、雨、成長、漁業、魔法を司り、「カネ」の神は、生殖、日光、水、森林の神であり、「ロノ」は、収穫の神であり、雷、雲、風、海、農業といった生産力の神であった。最後の「カナロア」の神は、海洋と海風の神であるが、病気を癒す神でもある。これら4人の神以外にハワイ人たちに影響を与えた神は、火山の女神ペレ、フラダンスの女神ラカなどがある。⁶⁴

このような多くの神を信じていた彼らの生活は、祖先の南太平洋のポリネシア文化に依存しており、タヒチ島との往来が盛んな時期にハワイ諸君に持ち込まれたさまざまな生活様式は、タヒチとの交流を途絶えた後も、純粋な形で維持され続けた。

2 節 ハワイ固有の教育

ハワイの基幹産業は、1778年ジョームズ・クックが来島するまで1000年以上にわたって農業と漁業であった。ハワイ社会では生産力が停滞していたため、子どもたちは大人たちが経験したことを伝達してもらえればそれで事足りた。「金属、書き文字と他の民族や文物との接触という刺激がないのにもかかわらず、ハワイ人たちは決して単純な石器時代のままの生活を送っていたのではなかった」⁶⁵のであった。すなわち、教育とは、大人たちの農業、漁業の技術を経験を通して学ぶことである。「教育の目標は、子どもたちに社会での役割を果たしうる成員として、十分に参加出来るように準備することであった」⁶⁶。すなわちハワイ人の子どもの教育内容・形態は、ハワイ社会の基本的価値と欲求を反映していた。また、ベッティ・ダンフォードは当時の教育について次のように述べている。「古代ハワイでは学校らしいものは何一つなかった。これは子どもたちが学習をする必要がないということでは決してなかった。彼らは、観察や手助けすることによって大抵のものを学習した」⁶⁷とのべているように、生活の場からの学習が主であった。また、スツーパーも「彼らの民族学、すなわち社会的、政治的、経済的、宗教的そして血族的制度の様式や組織によって、教育・学習の内容や方法が規定されていた。学習は、今日の見方からすれば、すべての生活活動と密接に結びついていた」と述べている。⁶⁸

a. 家庭教育

原始共同体のハワイ社会では大家族制が支配的であり、それゆえ家庭教育の占める役割が大である。伝統的なハワイ社会では、年長者が教師であった。両親、祖父母や他の家族構成員は自分たちの技術を子どもたちに伝えていた。これは以下の言い伝えからもわかるであろう。

「両親のすることは、子どもたちはするだろう

両親の知識は、無意識に子どもたちに吸収される。」⁸⁹

カマウスはこれに関して次のように述べている。

「両親は死ぬまでに、子どもたちを教育する。息子たちには、農耕と漁業を、娘たちには、タバを染めたり、敷物を織ることを」。⁹⁰

また、メリー・K・プクイは、彼女の祖母の教育について次のように述べている。

「毎日、祖母は私に『われわれが昨日行った場所と、その場所を守ってくれるアウマクア（祖先の神）を思い出すか』とたずねる。そして、3日後に、『さあ、再び言ってごらん。アウマクアの名前は何だったかね』」⁹¹

祖母は、各家に伝わる祖先の神の祭っている場所へ子どもたちをつれて行き、その雰囲気を知らせることにより、神の存在を知らせる。その経験をくり返すことにより、自然と学習が出来るのである。

このように子どもたちが「責任を持つ年齢」に達し、地域社会での教育を受けるまで家庭教育が大きな役割を果たしていた。

b. 地域社会での教育

ハワイでの社会経済上の土地の単位はアフプアとよばれており、それは生産と分配に必要なものである。アフプアは、山から海岸までの海岸線に垂直な線と線との間の領域を示しており、そこに住む住民は、それぞれ独自の経済圏を形成している。これらの各地域は、森林資源、農産物、水産資源がそろっており、ほぼ自給自足が出来る1つの経済圏を形成していた。

このような自給自足の社会の中で子どもたちは、地域社会の大人たちからい

いろいろなものを学んでいく、特に地域社会では、族長のリーダーシップの下で、さまざまな仕事が行なわれていく。農地を作る、穴を掘る、タロ畑を灌漑する、養魚場を作る、海岸で魚を養魚する、神殿を作る、宗教行事を行うといったことが、地域の成員によって取り行われる。子どもたちは、これらの作業を族長の指導の下に学んでいく。

ハワイ社会は前述したように階級社会であるため、階級によって学習する内容も異なってくる。カフナ階級の子どもたちは、さまざまな技術や知識を身につけることが求められている。医学を司る階級の子どもたちは医学に関する知識を教える「学校」で、熟練者たちからさまざまな知識を伝達される。⁶³

古代ハワイでは、カフナ階級へは、徒弟制度の下で、職人、商人等のさまざまな技術教育が教授され、また一般の人たちへは、日常生活を送るに必要な知識が教えられていたが、文字そのものが存在しないため、実生活に基づいた、経験を重視する教育が行われていた。これは生活重視の教育といえよう。⁶⁴

また、アリイ階級の子どもたちは、槍投げ、槍突き、レスリング、ボクシングといった戦闘に必要な体育実技を学ばねばならなかった。これらを習得した後は、実践訓練が求められる。槍、こん棒、短刀、石を武器にして、模擬戦が行われるが、これらの行為はたいへん激しいものなので時として死人が出る。⁶⁴

c. 宗教と教育

ハワイの教育の根底に存在するのは、宗教であった。すべての知識は宗教的色彩を持っているのは驚くに当たらないことであり、今日でさえ、ハワイ人の生活の中に古代の宗教的要素の残存を見ることが出来る。カプー制という階級制度と宗教とが結び付いていた社会構造の中で、さまざまな教育的行為が機能していた。

それらの一例としてフラ・スクールを取り上げてみる。フラは神に対する祈りを体で表現したものであり、チャントと呼ばれる祈りをした後に、踊りがなされる。今日もフラダンスは残存しているが、その中でもクラシック・フラは、より古いものを伝承している。わが国のミコが神前で捧げる踊りによく似ているクラシック・フラは、宗教性を今日まで残したものだといえる。

フラ・スクールに入学した生徒には、態度、服装、個人の身の回りと清潔に對して厳しいルールが定められていた。また、フラの教師に返答することは堅く禁じられ、絶対服従の教育であった。彼らは祭壇の準備にたいそう氣を使い、そのような宗教行事から教育は始まる。最も有名なフラ・スクールは、ペレの神がロヒアウの神に出会ったカウアイ島のケエ・ハエナに存在した。

教育内容についてこの学校の教師の1人は次のように述べている。

生徒に、忍耐強く言葉と音を聞き、それを学ぶことが求められた。そして、もし彼らが言葉や音を拾うことが出来なかったならば、それは集中力の欠如として個人の欠点と見なされる。

以上、古代ハワイオ教育について述べてきたが、デビッド・マロは、当時の教育目的を以下の6点の習得であるとしている。1. 社会体制の原理についての知識、2. 戦争の仕方、3. 個人的技能、4. 勇敢さ、5. 宗教的行事と労働形態の尊重、6. 節制生活である。

ウイストは当時の教育の特徴を2点にまとめている。1. 経済的理由からではなく、世襲制の下で行われていた、2. 公的な教育機関は存在しないし、また若者は私的教育機関で学ぶか、又はそれ以外の殆どのものは、経験から学ぶだけで教育機関では学ばなかった。

ただ、ハワイではヨーロッパ人來島以前の教育実態はあまり把握されていない。それは当時の状況を記録する文字が存在しなかったのが、大きな理由であろう。また、ハワイ人口の大幅な減少のため、伝統、文化、知識の伝承が後の世にうまく伝えられなく、デビッド・マロ等のハワイ人知識人の記録にも限界があり、当時のハワイに関する情報保存に失敗したと思われたためでもある。

3節 ジェームズ・クック到来以降の外国の影響

a. クックの到来

1778年1月イギリス人ジェームズ・クックは、「レゾリュション」号、「ディスカバリー」号でタヒチ諸島から北極へと向う途中、偶然ハワイ諸島に

たどり着いた。彼は後にこれらの島々を彼の後援者サンドウィッチ伯爵にちなみサンドウィッチ諸島と名付けたのであった。彼はオアフ島に最初にたどり着いたが、強風のため北方のカウアイ島まで押し流され当地のワイメアに上陸した。当時のハワイ人たちの状況をクックは次のように述べている。

「彼らは（カヌーに）3人から6人づつ乗っていた。そして、彼らが近付くにつれて、われわれは、最後の寄港地オタヘイテ島（タヒチ島のこと——筆者注）周辺の島々の言語を彼らがしゃべっているのが分かった時、たいそう驚いた——いくつかの小さな釘又は鉄の小粒が、彼らは他の品物よりも重宝がったのだが、彼らに与えられた。これらの鉄製品の代わりに、多くの魚や甘薯が交換された。」

クックの回態によれば、当時のハワイでは石器しか使用されておらず、鉄は彼らにとって好奇心をそそるものであり、また彼がたびたび寄港した南太平洋の民族と同種の言語を話すことを発見している。彼はポリネシア人たちが、太平洋の孤島にまで渡来していることに驚きを禁じえなかった。彼らヨーロッパ人たちにとって、ポリネシア人たちがその昔タヒチとハワイとを往復したことなどは、想像することが出来なかった。

翌年、再度ハワイ諸島にやって来たクックは、今度はハワイ島に投錨した。その時期ハワイ人たちは年に1度のマカヒキ祭というロノ神を称える行事のまっ最中であり、クックはハワイ人たちからロノ神と同一視され、歓待を受ける。これはアメリカ大陸のインディオたちが、スペイン人たちを彼らの信仰する膚の白い神と勘違いしたのと同様である。

クックたちは、南太平洋の民族と接した経験があるため、彼らへの対応には慣れていていたが、ハワイ人たちがクックをロノ神として崇拝したことについては、単なる歓待としてしか受け止めていなかった。彼らはクックたちに最上の料理を提供し、ボクシングやレスリングの試合を見せクックたちを楽しませたが、彼らにとってはこれは宗教的行事の一環であった。

この祭りの終了とともにクックたちはハワイ諸島を後にしたのだが、帰路途中彼らは激しい嵐に会い「レゾリューション」号の最前部のマストが傷んだため、再びハワイ島へ戻った。しかし、そこでは既に祭りは終わっており、ハワ

イ人たちは、ロノ神であるクックの船がひどく破壊されたのを見て、クックのロノ神であることへの疑念が生じてくる。そのため、ハワイ人たちはクックたちを単なる異邦人としてしか見なくなり、極端に待遇が悪くなる。彼らはクックたちの所有物を盗むことを平気で行い、この結果クックたちとハワイ人たちとの小競り合いが生じる。クックは彼らに対して高圧的な対応をすることにより、この事態を打開しようとして、逆に彼らに殺されてしまう。「ハワイ人たちがクックが神でないことが分かった時、彼らはひどくだまされたと感じ、彼を殺してしまった」のである。

クックの死後、ハワイ人への恐怖もあって、しばらくの間、ヨーロッパ人たちがハワイ諸島へ行くことはなかった。1786年イギリス船2隻、フランス船2隻が寄港し、ハワイ人たちの対応を見た上で、徐々にヨーロッパの船舶がハワイを訪れるようになる。彼らの目的は、ハワイでの食糧や水の補給だけでなく、領土的野心もあった。すなわち、ハワイ諸島はアメリカと中国の中間点に存在し、貿易船の中継点としての役割が大であるとともに、この諸島を手に入れることは、軍事的に見ても自国の力を強化するために役立つだろうと考えられた。クックのハワイへの渡来は、ハワイ諸島が欧米列強による植民地化の一つのステップとしてとらえる必要があろう。

b. カメハメハ1世のハワイ諸島統一

イ. カメハメハによる統一

当時、ハワイ諸島は、ハワイ島とマウイ島ハナ地区をカラニオプウ、ハナ地区以外のマウイ島をカヘキリ、オアフ島をペレイオホラニ、カウアイ、ニイハウ両島をカエオクラニがそれぞれ支配する4つの王国より成り立っていた。ハワイ島のカラニオプウは、ハワイ諸島の統一を目指し、まずマウイ島のカヘキリを攻撃したが、その途中の1782年死去してしまったため、彼の意図は挫折してしまう。彼の後継者争いの中で頭目を現したのが、カメハメハである。彼はヨーロッパ人たちがもたらしたマスケット銃や大砲といった西洋式の武器に注目し、その効用を認識し、それを最大限活用した。彼はハワイ島内の有力な族長たちとの戦いに、新しく手に入れた武器を使用し、ハワイ島の支配を計った

が敗れ、彼の故郷マウイ島へと脱出し、まずマウイ島（1790年）を統一しその勢いを借りハワイ島（1791年）、次にオアフ島（1795年）と征服していく。オアフ島ではヌアヌパリでペレイオホウニの軍隊を全員崖から突き落とし全滅させて、その余力を借って、カウアイ、ニイハウ両島を征服しようと試みたが、天候不順のため失敗する。数年後、王カエオクラニに使者を送り、ヌアヌパリでの虐殺を示すことにより、強圧的にカウアイ、ニイハウ両島も1810年従属させ、ここにハワイ王国が成立する。

ロ. 白人の顧問

当時太平洋を航行する船から多くの白人たちがハワイで下船したが、彼らの多くはあまり仕事もせず、放蕩ざんまいの生活を送っていた。1790年アメリカ船「フェア・アメリカ」号の船員アイザック・デイビス、イギリス船「エレアノラ」号の船員ジョン・ヤングの2名の白人がカメハメハに捕らえられた。両名は他の白人とは違い、軍事的・政治的才能を持ちあわせていたため、カメハメハに見込まれて彼の顧問となった。カメハメハは、これら2人の軍事的顧問の助言を得て、欧米式の戦闘方法を取り入れ、従来の伝統的な戦いしか出来ない、各地の王や族長たちを次々と破っていった。彼の戦闘方法は欧米の火器を最大の武器とするものであったが、彼自身たいそう勇者であり、死を恐れずに敵に突撃していき、敵が徹底的に打ち破られるまで攻撃したことにより彼に勝利がもたらされたのであった。

また、1792年タヒチからハワイへやって来たジョン・バンクーパーは、クックが第2回目にハワイを訪問した時の一員であり、イギリスの海外膨張政策の一環として、カメハメハに近付いていく。バンクーパーは、ハワイをイギリス以外の国に所属させないために、カメハメハに「ジョン・ヤング、アイザック・デービス以外の外国人をハワイに定住させてはならない。その他の白人は、ろくでもない者たちである」と助言し、極力、中立の立場を取ろうとした。このようなバンクーパーの態度を見たカメハメハは、バンクーパーを通してイギリスに近付いていく。カメハメハは、1794年族長たちの前でハワイがイギリスに属すると宣言し、イギリス国旗を掲揚しイギリスの力を借りてハワイ

諸島統治を強化しようとしたが、イギリス政府がそれを承認しなかったため、彼の試みは失敗に終わった。しかしながら、彼は終生親英的態度を変えることはせず、ハワイ王国の国旗をイギリスのそれと似せて作り、また支配階級の人々のイギリス人との混血を奨励した。彼は白人特にイギリス人たちの助力を得て、統一問も無い王国内の反対勢力すなわち各地の王・族長の力を剝奪し、実質的な統一を成し遂げていった。特に1794年カヘキリが死去した後は、カメハメハに敵対する勢力はなくなった。

c. 伝統的社会制度の崩壊

イ. ハワイ経済

ハワイでは、当初欧米の船舶に食糧、水、燃料を供給し、その代わり外国の様々な品物を物々交換することにより、その経済が従来の自給自足のものから、徐々に変化を遂げるようになる。ハワイ諸島を統一したカメハメハは、欧米の武器が自己の権力維持のための不可欠のものであると認識し、単なる物々交換の範囲を越えて、ハワイでの物産を外国人に売り付けることにより、より多くの武器を調達しようとした。そこで彼が目をつけたのが白檀材（サンドルウッド）である。これは中国ではたいそう珍重され高価格で売買されるため、カメハメハは、多くのハワイ人たちを動員し、白檀材の切り出しを図った。白檀材は、多くの武器や欧米の物品に交換され、この結果ハワイ経済が欧米列強の経済との交易なしでは成り立たなくなる。

ロ. ハワイの人口

ヨーロッパ人たちとの交流の中でハワイにさまざまな病気（性病、はしか、腸チフス、百日咳、流行性感冒など）がもたらされる。千年以上無菌状態であったハワイ人たちは、これらの病気に対する抵抗力が全くなく、例えば流行性感冒によっても多くのハワイ人が命を落とした。また、性病が普及することにより、彼らの出世率は極端に落ちてしまう。

更にまた、ヨーロッパ人が持ち込んだアルコールは、彼らを虜にし、中には中毒症状を呈するものも現れる。このような理由によりハワイ人の人口は急激

推定人口統計

年	推 定 人 口	推 定 者
1778—79	400,000	キ ン グ (1779年推定)
	242,200	ブ ラ イ フ (1779年)
	200,000	デ ィ ク ソ ン (1787年)
	200,000	ゴ ル プ ニ ン (1818年)
	300,000	ジ ャ ル プ ス (1843年)
	100,000—150,000	バ ッ ク (1951年)
	200,000—250,000	シ ュ ミ ッ ト (1971年)
1796	270,000—280,000	ア ダ ム ス (1937年)
1800	165,000—195,000	シ ュ ミ ッ ト
1803—04	266,000—280,000	ア ダ ム ス
1804—05	152,000—154,000	ア ダ ム ス
1805	264,160	ヤ ン グ ソ ン (1805年)
1819	144,000—145,000	ア ダ ム ス
1823	142,050	シ ャ ル プ ス (1843年)
	134,925	ア ダ ム ス
	135,000—145,000	シ ュ ミ ッ ト
1831—32	130,313	人 口 統 計
	124,449	ア ダ ム ス

に減少する。上の表は推定人口の変遷を示したものである。

クックが来島した頃のハワイ人口は10万人から40万人と様々な説があるが、20万人から30万人が妥当な線と思われる。その人口が1831—32年のハワイ初の人口統計の結果13万人までが減少していく。この人口減少は、上の表を見ても分かるように、推定者によって誤差はかなりあるが、欧米人の来島が頻繁になった、18世紀末から19世紀にかけて特に著しい。

ハ. ハワイの社会制度

カメハメハ1世が1819年死ぬまで、彼はハワイ諸島を伝統的なカプー制度により支配した。しかしながら、経済制度の変化、人口のほぼ半減という状況により、従来のような制度をそのまま維持することは不可能であった。さらに、カメハメハという族長出身ではあるが、武力で統一を図ろうとする新興勢力者にとって、カプー制度は大きな障害となる。このため、カメハメハはカプー制

度の維持と変革という2つの矛盾をかかえながら、支配を強化しなければならなかった。しかしながら、旧勢力の力をそぐことに全力を注いだ彼は、徐々にカパー制度を自己を中心とする王国の社会制度に作り替える必要にせまられていく。

4 節 教育における外国の影響

この時期のハワイの教育は、従来の伝統的な教育とはあまり大差がなかった。ここでは白人たちが当時のハワイの教育をどのように見ていたのかを述べてみたい。

a. 欧米からの影響

イギリス人ジョン・ヤング、ハワイ人オボオキアの2人について述べてみる。

イ. ジョン・ヤング

「彼ら（ヤングとデービス——筆者注）は、最初の宣教師たちと呼ばれてきた。かれらは、勿論、宣教師ではなかったのだが、確かに宣教師たちの仕事のための道を準備した」とA・ウイジントンが述べているように、ハワイに欧米文化を持ち込むのに大いに貢献した。ヤングとデービスは、共にカメハメハに重用され、特にヤングはカメハメハの助言者となり、ヤング族長と呼ばれ、族長として、ハワイ王国と欧米との交渉に当たった。

彼は、カメハメハの姪と結婚し、孫の1人エンマはカメハメハ4世の妃となり、ハワイの実質的な支配者となる。彼は、支配階級の一員となるが、「ヤング家の生活様式はヨーロッパ風のものであった。」⁶⁷カメハメハが死去した時、ハワイ式に一週間すべての規則が撤廃され、あたりは無秩序状態になったが、ヤングの家だけはそうではなかった。「もし私の子どもがこのようなことをしたら、彼らは我が家の戸口に再び近づくことは出来ないだろう。」と述べている。彼はイギリスでの育成過程で厳しいプロテスタントのしつけを身につけ、

これをハワイでの自分の家庭でも維持しようとした。彼は、意図するしないにかかわらず、キリスト教文化をハワイの支配階級に広めたのである。

ロ. オボオキア

ハワイ島生まれのオボオキアは、ハワイ島内の戦闘で両親を失い、叔父の下で育てられていたが、外国に対する関心が大きく、1809年、ハワイに交易に来ていたアメリカ人プリントナル船長に願ひ出て、その船員となることが出来た。彼の一生涯の友人となるトーマス・ホポオ⁶⁹も一緒に船でハワイを出ている。彼ら2人はプリントナルの船で、アメリカ・ニューヨークと中国・広東との間を年に幾度となく往復することにより、世界の状況を徐々に把握していく。船長プリントネルは、ニューイングランド地方出身で、熱心なプロテスタントの信者であり、彼がニューヨークに帰ると必ず2人のハワイ人青年を故郷の教会に伴った。プリントネル夫人もまた熱心なプロテスタントで、この夫妻との生活の中でオボオキアもその影響を受け、キリスト教に改宗していく。当時、ニューイングランド地方のプロテスタント教会は海外伝導に熱心であり、コネティカット州に外国伝導学校を設立している。ハワイ伝導を意図した教会側は2人のハワイ人青年に注目し、彼らをこの学校へと入学させ、将来の人材養成を図った。ある牧師はオボオキアを評して次のように述べている。

「他の者が遊んでいる時間、オボオキアは勉強していた。1人でいる時、彼は喜んで読み書きの学習に励み、友人という時、語学の上達を目指していた。もし会話にあまり興味がなくなれば、ポケットから聖書を取り出して読む⁴⁰。」

このように勉強熱心かつ強烈な宗教心の持ち主のオボオキアは、海外伝導者として完璧な人材であった。彼は聖書やその他伝導に必要な書物をハワイ語に翻訳し、またハワイ人の宗教をアメリカ人に紹介し、ハワイ伝導の下地を作ったといったが、発疹チフスのため1818年、26歳の若さでこの世を去っていった。彼はハワイへ帰ることを夢見、死の床でも「ハワイへ帰りたい、しかし出来ないだろう」とつぶやきながら死んで行く。彼の死後2、3ヵ月後、14人の青年男女がハワイ開教の旅へと出る。この宣教師団こそが、後のハワイ宗教界・教育界、後には社会制度・政治とすべての領域に大きな影響を及ぼす人た

ちであった。

ヤングとオボオキアという2人の人物は、1人はイギリス人、1人はハワイ人であるが、両者共ハワイに欧米文化を持ち込み、ハワイをキリスト教化するのに大いに貢献する。ハワイ諸島はイギリス人クックが初めて欧米に紹介したように、当初からイギリスとの結び付きが強かった。カメハメハは、ヤング、バンクーバー等の助けを借りてハワイ諸島を統一することが出来た。しかし、ハワイ諸島へはアメリカ人、フランス人、ロシア人、スペイン人と様々な国の船が立ち寄っており、各国がその地經的役割の重要性を認識していたのも事実である。

アメリカもその例にもれなかった。当時、ニューイングランド地方のプロテスタント各派は競って世界各国へ伝導者を派遣し、勢力拡大を図りつつある時期であった。その先導者として活用されたのがオボオキアであった。彼の死は教会側の期待外れであったが、それ以後ハワイがイギリスとアメリカ両国の勢力争いの場となっていくのである。ジョン・ヤングをイギリスの影響力を行使した代表とすれば、アメリカ海外伝導宣教師団はアメリカの影響力を行使した代表といえるであろう。教育も、ハワイの王・族長階級が比較的イギリスの影響を受けたのと対象的に、庶民階級はアメリカの公教育の影響を受けていく。

b. 欧米人の見た当時のハワイの教育

1826年イギリス人 J. S. エマソンは、当時を思い出して次のように述べている。

「近所のいたるところで、5、6人の熟練した女性たちが、カパを打つことにより鳴り響く音楽のような音を聞くことが子ども心に大きな喜びであったことをよく覚えている。女性たちは、それぞれリズムミカルに打つことによって、時として彼女たちの友人と簡単な電話のようなメッセージを送るといった音楽的な行為をすることに誇りを持っていた。」⁴⁰

ハワイの女性にとってカパを作ることが教育であり、それは単に技術教育だけでなく、音楽、人間関係を教えることででもあり、生活に根差した総合的な学習といえよう。

この時期ハワイに滞在したイギリス人ウィリアム・デービスは次のように述べている。

「たいそう驚いたことなのだが、私がこの土地に滞在した間にこの諸島にはいかなる宣教師団も存在していなかった。大部分の白人は原住民の女性と結婚しており、そのため彼らは家庭を持っていた。しかしながら、彼らは自分たちの子どもの教育や宗教的教養に殆ど関心を持っていなかった。私はアルファベットの文字以上を知っていた子どもにお目にかかれなかった」

欧米人の子どもですら、近代的な意味での学校教育は受けることが出来なかったのが当時のハワイの実情であった。ヤングは、最初の夫人との間に出来た2人の子どもをアメリカで教育をうけさせている。この時期の教育は、社会的変化にもかかわらず、伝統的な教育方法が支配的であったということが出来る。

注

(1) ハワイ諸島の形成は、まず現在のハワイ島の位置に地球のマグマが噴出し火山島が出来る。時代が下るにつれて、地表のプレートが西へ移動し、火山島も西へ移動。そのため、従来マグマが噴出していた位置は海中になってしまうため、また新たな火山島が出来る。現在ハワイ諸島は、西からニイハウ、カウアイ、オアフ、モロカイ、ラナイ、カホオラヴェ、マウイ、ハワイの各島より成り立っているが、西のニイハウ、カウアイ両島は、その形成が一番古く、それゆえ土壌も農耕に適し、樹木も多い。それに反し、一番新しいハワイ島は、全島熔岩に覆われ、表面下数十センチ下は堅い岩石であり、耕作地域が限定される。

なお、ニイハウ島より西は、ミッドウェー島まで小さな島ないし環礁が点在している。これらは太古、現在のハワイ島で発生した島が西へ移動した結果であるといわれている。最近の調査では、これより西側の海底にも同じような火山島の名残りが点在していることがわかっている。

(2) ポリネシア人は、紀元前に南インドからインドネシアに移住し、更に現在のポリネシアへと渡っていったといわれている。

(3) 先住のマルケサス人と同様、彼らの移住年代は推定するしかないが、この頃のポリネシア人たちは、現在とは違い、大型の船を乗り回す海洋民族であり、ハワイとタヒチとを自由に往来していた。Adele Marie Lemon, "Hawaii, Lei of Islands; A History of Catholic Hawaii", Tongg Publishing Company, 1956, p. 2.

ハワイ人の故郷は、タヒチ島近くのハヴァイ島であるといわれており、現在でもラナイ島とカホラヴェ島との間の海峡は、「タヒチへの道」と呼ばれており、往時のハワイ

とタヒチとの往来を物語るものである。

A. D. 500年、最初にハワイにポリネシア人が住み着いてから200—300年間は、人口はわずかであったが、その後は100年毎に人口は倍增していった。

- (4) Ralph S. Kuykendall, "The Hawaiian Kingdom vol. 1 1778—1854", The University Press of Hawaii, 1938, p. 3.

(5) 当時、太平洋を航行する大形船が続々と建設された。ポリネシア人たちは、太陽、星を観測する技術に秀でており、自分たちの目的とする方向を正確に把握していた。

- (6) ハワイ人の歴史家デビッド・マロによれば、スペインのギャリオン船がハワイ島のコナに立ち寄ったと記しているし、デ・ヴィウロボ (1542) とガエタノ (1555) がハワイ諸島に寄り、ガエタノはメサ島と名付けている。Ibid., p. 4.

しかしながら、クックがハワイ諸島に来島した時、ハワイ人たちは鉄製品の有用なことを認識しており、それらを手に入れることを熱望した。また、ハワイ人が儀式で身に着ける帽子、マントは、ポリネシアの他の島々では見ることが出来ず、スペイン人の服装をまねたのではないかという説もある。

- (7) ハワイ人たちは、塩田式の製塩法をとっていた。

- (8) Betty Dunford, "The Hawaiians of Old", The Bess Press, 1980, p. 25.

- (9) 新村出、広辞苑、岩波書店、昭和50年、p. 1393.

- (10) King は王、chief は族長と訳した。king は各島ないし、それに近い領域を支配しており、chief は酋長とも訳されるが、小さなコミュニティを支配している。

- (11) Ralph S. Kuykendall and A. Grove Day, "Hawaii, A History", Prentice Hall, 1961, p. 7—8.

- (12) Renard Lueras ed. "Hawaii", Apa Productions, 1981, p. 31. カプーの違反者にも救い道はあった。彼らは各島に数カ所ある神殿（ヘイアウ）に逃げ込み、そこで約一週間過ごせば、身が清められカプー違反への罰則が許される。そのため、カプー違反者たちは必死で神殿へと逃げ込もうとする。運悪くそこへの途中で捕まれば重い刑罰が待ち受けている。神殿の敷地は、200—300坪しかないたいそう狭い場所であり、その周囲は木の神像で囲まれており、支配階級であるアライ階級ですら、違反者を捕まえるために神殿内には踏み込めない。

- (13) Marion Kelly, 'Some Thoughts on Education in Traditional Hawaiian Society', College of Education, University of Hawaii, "To Teach the Children—Historical Aspects of Education in Hawaii", Bernice Pauahi Bishop Museum, 1982, p. 6.

- (14) 通常ハワイ人は、家では小祭壇を作り、諸々の神々を拝み、戸外ではヘイアウと呼ばれる神殿を作り、拝んだ。この神殿は火山岩の壁に囲まれ、屋根は植物の葉で葺かれていた。カバに包まれた神託の塔、犠牲（人間や動物）を祭る祭壇、石や木の彫刻物、やしの葉と羽毛で作られた神像などで、これらの神殿は飾り立てられていた。(Dunford, Ibid., p. 48—50)

ハワイには種々の民話が存在しており、近年これらを発掘調査しようとする動きが活

- 発となってきている。Vivian L. Thomson, "Hawaiian Tales of Heroes and Champions", University of Hawaii Press, 1971. にはハワイの民話が集められている。
- (15) Ralph K. Stueber, 'An Informal History of Schooling in Hawaii', "To Teach the Children", 1980, p. 19.
- (16) Kelly, Ibid., p. 4.
- (17) Dunford, Ibid., p. 43.
- (18) Stueber, Ibid., p. 20.
- (19) Kelly, Ibid., p. 9.
- (20) Ibid., p. 9.
- (21) Ibid., p. 10.
- 女性には、成長とともに、そのタバ製造技術の向上が求められる。タバ製造については、Margaret Titcomb, "The Ancient Hawaiians—How They Clothed Themselves", Horgan Press, 1983. に詳しい。
- (22) ハワイでの医学の教授は、地面の上に人体の絵を描き、この絵を基にして、年長者である教師が子どもたちにいろいろな医学的知識を教えた。
- (23) 教育学者ウイストによれば、このような生活重視の教育は、20世紀に入ってハワイに持ち込まれたデューイの進歩主義教育と相通じるものがある。すなわち実生活に基づいたカリキュラムを用いることによって、理論と実践を結び付けようとした。(Benjamin O. Wist, "A Century of Public Education in Hawaii", The Hawaii Educational Review, 1940, p. 7.
- (24) "Hawaii", Ibid., p. 33—34. ハワイでの戦闘はまず、神に祈りを捧げ、神の加護の下で始める。戦闘開始日は神から与えられた理想的な日が求められる。そして、槍、石などを使用して集団での戦闘に入るわけであるが、戦闘がこう着した場合や、双方犠牲を多く出した場合、両集団の代表者の戦いで勝敗を決する場合もある。ただ、戦闘の結果勝敗が決定的になった場合、勝者は敗者に対して寛容ではない。殆どの敗者には死が待っているだけであり、運が良かったとしてもアライ階級から脱落しカウワ階級に入られる。
- (25) Wist, Ibid., p. 10.
- (26) College of Education, Ibid., p. 11—12.
- (27) Wist, Ibid., p. 9.
- (28) Ibid., p. 11.
- (29) R. S. Kuykendall and A. G. Day, Ibid., p. 14.
- (30) George Armitage, "A Brief History of Hawaii", Hawaiian Service, 1973, p. 9. ハワイ人たちには、クックやその他の船員たちが、魔術をしているように見えた。口から火を吐いたり（喫煙）、手を体の中に入れたり（ポケットに手を入れる）や長い鉄の棒（マスカット銃）で人を殺傷すること、などがその理由であった。(Ibid., p. 9—10)
- (31) Ibid., p. 11.

- 32) クックは、1769年タヒチ島に寄港し、その島の族長の1人ポーマレと友好関係を結ぶ。クックの援助を受けたポーマレは、後にタヒチ諸島を統一し、ポーマレ王朝を築く。タヒチでも鉄製品が存在せず、クック等のイギリス人たちから得た火器が最大の武器となった。ハワイのカメハメハ自身が強大な力を持ってハワイ諸島を統一していったのに反し、ポーマレ自身あまり武力を有せず、ただ欧米人の援助のみを当てにしたため、その権力の基盤は弱かった。(T. Henry, "Ancient Tahiti", B. P. Bishop Museum, Bulletin 48, 1928.)。クックの、現地人同士の争いに介入することによりイギリスの勢力を強化しようという方針は、ハワイでも同じであったが、彼自身早くに死去してしまい、彼の後継者パンクパーに受け継がれた。
- 33) ヤングは、アライ階級の女性と結婚、1835年死去するまでハワイ島の総監督職を勤め、デイビスは貿易で巨額の富を得た。また、1819年カメハメハが死去するまでに200人の外国人(白人)がハワイに居住していた。
- 34) 環境面から考えてみると、ハワイは火山島のため、一度環境が破壊されてしまうと回復がほとんど不可能となるため、これら破壊された白檀の森林は再び元へ戻ることなく、現在ではハワイ諸島ではほとんど見られなくなってしまう。
- 35) Robert C. Schmitt, "Historical Statistics of Hawaii", University Press of Hawaii, 1977, p. 7.
- 36) Antonitte Withington, "Golden Cloak—The Romantic Story of Hawaii's Monarchs", Mutual Publishing, 1986, p. 65.
- 37) Ibid., p. 73.
- 38) Ibid., p. 73.
- 39) オボオキアは、クリスチャンネームを持っていなかったが、ホボオは、トーマスという名を持っている。ホボオは、1795年オウイへに生まれ、オボオキアと共にアメリカに渡り、キリスト教に触れる。彼の自叙伝は、'Memoirs of Thomas Hopoo', "The Hawaiian Journal of History", vol. 2, 1968, p. 42—54. に詳しい。
- 40) Ibid., p. 73.
- 41) Kuykendall, Ibid., p. 6.
- 42) Archibald Campbell, 'A Scotsman in Honolulu', A. Grove Day and Carl Stroven ed., "The Spell of Hawaii", Mutual Publishing, 1968, p. 98.